

計画者	合同会社 北海道山岳整備・上川総合振興局			
担当者	氏名	岡崎哲三	電子メール	sangakuseibi@potato.ne.jp
			電話番号	0166-84-5115
対象箇所	裾合平分岐付近～裾合平木道			
登山道 管理水準	保全対策ランク	A・B・C・D	利用体験ランク (大雪山グレード)	1・2③・4・5
作業の 目的	裾合平を通る木道箇所が荒廃し、腐食により崩れた木道が放置され、通行に危険が生じている場所も多い。また、木道脇の植物帯に面した法面部は凍結融解現象により少しずつ崩れが広がり、後退している(侵食は拡大している)。危険箇所を少しでも減少させ、法面部には植物を復元させることで侵食を止める施工を行なう。また、今施工で使う資材や方法は、今後の山岳管理で効果が高いものと思われるので、昨年度に引き続き、試行的な施工も行なう。			
利用する工 法	分散排水工	床止工	土留工	マルチング工
	路面処理工	段差処理工	植生基盤工	その他()
作業予定日 時又は期間	2018年9月1日(メンテナンスは月末まで)		参加予定人数	50名程度
			参加者内訳	参加者の一般公募 ●: 実施する : 実施しない
安全対策 (保険の適用、 連絡網の整備 等)	ボランティア保険を適用。 山守隊のFB等を使用して一般に呼びかけ。			
主な資材と その調達 (予定)	資材	数量	調達方法	
	ヤシネット		現地採取/搬入(計画者の自己資金・寄付・その他)	
	番線・カスガイ		現地採取/搬入(計画者の自己資金・寄付・その他)	
	ジオウェブ		現地採取/搬入(計画者の自己資金・寄付・その他)	
	礫 木材		現地採取/搬入(計画者の自己資金・寄付・その他)	
道具の貸し出 し希望 (自然保護官 事務所・森林 管理署)	物品	数量	希望先	貸出予定日時
	背負子	20	環境省	8月30日
				返却予定日時
				9月3日
位置図(地形図、国立公園の公園計画図、国有林又は道有林の施業計画図など)				
事務局記入欄				
国立公園	保護規制計画: 特別保護地区			
	利用施設計画: 中岳裾合平線道路(歩道)			
	事業執行者: 北海道 担当部署: 上川総合振興局			
土地所有	国有林・道有林・その他()			担当部署: 南部森林室
天然記念物	該当あり・該当なし			担当部署: 東川町教育委員会(窓口)
備考	事業執行者が自ら行う補修。			

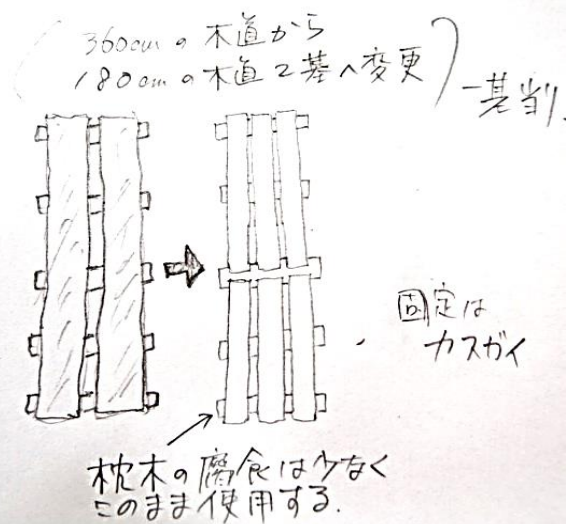
課題(問題点・作業の必要性)／ねらい・目標

裾合平分岐直前の木道が大きく崩れている。登山者の視線は分岐を見ることが多く、木道の崩れに注意出来ないことがある。また、分岐付近はシーズンにはすれ違いが多くなる場所でもあるため、崩れが激しい場所は危険である。2017年に怪我人が出た場所。緊急度は高いと判断した。

施工方法



既存木道2基（1基360cm）を新規木道4基（1基180cm）に再設置。



備考

課題(問題点・作業の必要性)／ねらい・目標

凍結融解現象で徐々に後退している法面部において、ヤシネットを使用した植生復元を行なう。

凍結融解現象で崩れる土砂を逃がさず、その土壌が新たな苗床になるようにヤシネットを配置する。

ネットを固定する方法は、べた張りや巻止め、さらにべた張りには周辺植生の種子を土壌と一緒に擦り付けるなど、試行を行なう。

施工方法



ネットはべた張りや巻止めを行なう。

現場状況によって方法を変えたり、あえて同条件で方法を変更し効果の違いを見るなど試行する

巻止め



昨年施工のジオウェブの隅にはチングルマの芽吹きが確認された。土壌堆積を増やすため、巻止めを行なう

流水でこれらの土壌が流されず、新たな種子の苗床にするべく、土壌堆積場を作る。



備考

上記の枠内写真は2016年施工のネット施工に復元した植物。

ネットだけでなく、土壌がネットに絡んだ時に芽吹きが多くなっていると思われる。

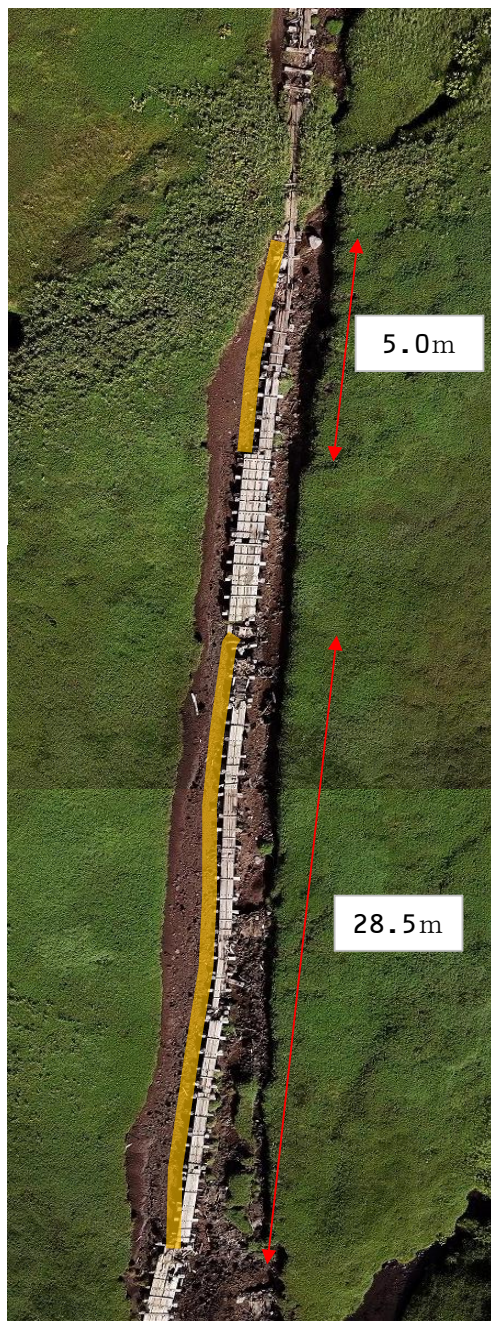
ネットに土壌が絡む試行を行なう。

課題(問題点・作業の必要性)／ねらい・目標

木道が腐食し、崩れがあり、杭の傾きから歩行面が傾斜し、歩行に危険が生じている。
 これらの木道脇に幅約1m弱のジオウェブを敷いて礫を詰め歩行路とする。現場は、もはやぬかるむ土壌(表土)は流れ去り、礫が出てきている状態。
 木道の再設置よりも路床を固め、踏圧や流水による土壌の移動を抑えることが必要と思われる。
 使用する礫は下流部の小沢に流されて溜まっているものを元に戻す形で使用する。

施工方法

黄線の約30mの区間をジオウェブ及び木柵により路床を礫固めする。



前年に行なったジオウェブでの床固め。
 礫の流出もなく、脇には土壌が溜まり、チングルマの芽吹きも見られる。
 表面に礫の追加を行なう予定。



備考

礫は約50mほど下流部にある木道を横断している小沢に流れ込んでいる土砂を利用する。
 昨年も同様場所からの利用を行なったが、今年確認すると新たな礫や土壌が流れて堆積している。
 運搬は人力運搬で行ない、礫集めは過剰に採取しないよう専門員を配置して行なう。

植生復元箇所にはモニタリングを行なえるように事前にデータを取り、
 年度ごとに状況を確認できるようにしていく。